

2017年度 自己評価（園評価）・学校関係者評価 結果公開シート

こどもの木かげ 野のはな空のとり保育園

1. 基本理念・保育方針

■こどもの木かげ 2002 基本理念

『汝らは、地の塩、世の光である』（マタイによる福音書5章第13節―14節）
キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。
こどもの木かげ（玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園）では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。

■野のはな空のとり保育園 ～保育方針～

- ・個々の子どものリズムに配慮し、動的な生活空間・静的な生活空間を考えた保育環境を提供し、能動的な活動を育てていきます。
- ・人の成長・発達の基礎ともなる、さまざまな場面や状況を受けとめたり人からの働きかけを受け入れたりする『うけいれる力』を育てます。
- ・自発的に試行しながら自らの取り組みを確かめられる『とりくむ力』を育てます。
- ・「もの」「ひと」「じぶん」の相互の関係を意識して生活世界に働きかけられるように『むかう力』を高めています。

こんな子どもに育ってほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

- ①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とかかわりをとおした生きる喜びや自己表現が達成」できるように
- ②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように
- ③あそびをとおして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように

すべては環境から

子どもが主体的・自発的にあそび、学ぶために不可欠な環境構成は、心地よく過ごし、生活し、あそぶ「空間（場所）」環境と、充分にあそび、休息する充実した「時間」の環境、質と量が配慮された遊具や本物・良質な家具や調度品といった「もの（道具）」の環境が基本的条件であり、これらをうまく組み合わせてあそびを支えるのが保育者の役割です。同時に子どもとの豊かで温かなかかわりも重要なことです。保育者がこうしたかかわりを高めるための人的な環境の一部でもあるのです。

2. 平成29年度 活動状況と自己評価

【基本的事項】

①子どもたちが、自らの力でとりくむ姿勢が育ち、周囲とかかわりを高め、育ち合っているか

大人との愛着関係を大切に、子ども自身が経験・体験を積み重ね、やってみたいという気持ちを高めていけるような環境や空間を設定してきた。子どもたちはそうした教具・遊具をおとなである保育者のみならず、他児とかかわりながら操作や雰囲気や互いにたのしむようになった。

②子どもたちに豊かな感性が育つようなとりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか

生活時間が長いことを考え、保育室内だけでなく、園外の活動も工夫し、季節を感じられるような場所での活動なども取り入れてきた。クレヨン活動を0歳から積み重ね、それぞれの表現する喜びを感じられるような体験もおこなっている。今後も、どのような体験をしていくことが望ましいのかという見通しをもち、保育をすすめていきたい。

【重点的にとりくむ課題】

園の保育方針に基づく保育計画の作成と実践

- ・園のコンセプトをふまえたクラス運営を考え、保育計画を作成・実践し、質の高い保育をおこなう
- ・『マネージメントサイクル』（計画→実践→考察）の強化

年度当初、園のコンセプトを確認する会議をもち、スタートすることができた。設定した目標をマネージメントサイクルに従い実行したが、考察の結果を次の保育につなげていくという連続性をもった計画の立案にまでは至らなかった。今後は1年間の中で何度もPDCAサイクルを回せるようにとりくんでいきたい。

保育者が意欲的に取り組めるために相互の良好なコミュニケーション活動をすすめ、質の高い保育をおこなう保育者を育成する

- ・組織としての基本「報告・連絡・相談」を遵守する
- ・さまざまな形の話し合いの場で、全員が自分の意見を述べ、認め合い気付きを得られる環境をつくる

日常的なコミュニケーションを円滑にすることを目標にとりくんできた。クラスの保育者間のコミュニケーションを図るだけでは狭い領域になってしまうので、プロジェクトの担当職員や業務担当を決める際には、いろいろな職員がかかわることができるよう担当者を決めておこなった。今後は初任者や中堅職員が自ら気づき、自発的に学ぶ姿勢を促すよう、すすめ方を考えていきたい。

長期的な展望にたった厨房設備の見直し、検討をおこなう

・開設15年が経過して、老朽化や現状に合わなくなってきた設備を見直し、こどもの木かけの長期的展望にみあった厨房業務と設備計画を構築する

設備の改修にむけ、他施設の設備調査や実際の調理体験をおこない、プランを作成した。次年度に設備改修工事をおこない、厨房設備の再構築をおこなっていく。

3. 今後の課題

- 1 OJT研修に関しては、ディスカッションや事例研究（ケーススタディ）等、実際の保育を掘り下げるような研修を深めるとともに、日常の保育活動のあらゆる場面で疑問が生じれば即リーダー・主任が共に考えるなど、全職員にとって実効性のある学びの機会とし、子どもたちに接することができるようにしていきたい
- 2 こどもの木かけの目指す「環境」について、従来から語ってきたが、若い職員が形式的理解にとどまらず、発達の理解を深めて、環境構成・空間教具のあり方を学び、子ども理解・内面理解、援助の方法を習得できるようとりくみをしていきたい。

【 運営委員会による学校関係者評価 】

1 評価項目の達成及びとりくみ状況について

園では玉成幼稚園と共通した62項目にもわたる評価項目を年度当初に設定し、それを基礎として自己評価を行った。個々の評価については概ね達成としており、取り組み状況は良好であると評価できる。0～2歳児は成長のスピードが速く、同じ学年でも成長度合いが異なるため、子どもの個別評価を大切にするためのケースカンファレンスを重視している。「すべては環境から」のコンセプトのもと、子どもにも保育者にも家庭的で心地よい生活空間を提供し、特に子どもの成長に合わせた環境づくりには深いこだわりを持って取り組んでいる。また、2歳児（保育園）から3歳児（幼稚園）への移行については、園庭でのあそびの中で子どもたちの心に自然に幼稚園への興味が湧いてくるように配慮されている。

2 今後とりくむ課題

自己評価にあるように、PDCAサイクルの充実と次の保育への連続性を持った計画の立案、クラスを超えた職員の連携をはかり、拡がりのある学びを促進するためのしくみ作り、厨房設備の再構築に取り組むことについて、運営委員会も同意した。特に、職員間の連携については、異クラスとの単なる情報共有ではなく園としての一体運営のあり方について、方向性も含め今後の検討課題となった。0～2歳は集団というより個が重視される年齢であるが、そこに一体感を持たせたいという、保育に対する真摯な姿勢と熱意が感じられる。

3 総合所見

女性の社会進出が進み家族のあり方が多様化し、保護者の保育園への期待は時代とともにめまぐるしく変化している。待機児童解消のために数多くの保育所が開設し、保育時間が長くなる傾向の中、保育時間を11時間までと設定し、それを守るには経営サイドにも相当の覚悟と工夫が必要であろうことが推察される。こどもの木かけの基本理念にのっとり、0歳から就学までの一貫した保育方針に基づく幼児教育の姿勢は、園庭での保育園児と幼稚園児の一体的な学びに現れており、幼稚園保護者からそれがとても「自然である」との評価を得られたところである。今後とも幼保一元の施設であることの特性を活かし、高い理念のもと保育の質を向上させ、子ども、保育者、保護者、地域にとって多面的な学びの場としての役割を担っていただきたい。

